

---

# 論理ウルフ

高橋あきのぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

論理ウルフ

### 【コード】

N3330E

### 【作者名】

高橋あきのぶ

### 【あらすじ】

八頭の狼が三つの獲物を分けるために会議を開きます。

八頭のオオカミがねぐらに戻った。本日の収穫はウサギが二羽とキツネが一匹、計三つの死骸である。

八頭のオオカミはメニューにこそ満足したが数には不満を感じた。あと一つ死骸があれば分けやすいのだが八頭で三つを分配するのは難しく、どこかで不公平が生じかねないからだ。彼らはきわめて論理的なオオカミであったため、のちに起こる論争を予見して対策を練った。

リーダーは最初に自分の要望を述べた。

「私はどうしてもキツネを食べたい。そのためなら多少取り分が少なくなっても構わない」

質より量を好むほかのオオカミは彼の要望を快諾した。

「あなたはキツネの肉をみんなより少なめに食べる。みんなこれに異存はない。さて、これを前提としてみんなはどうしたい」

副リーダーは六頭の顔色を窺って、誰かが発言するのを待った。ほどなく若いメスオオカミが挙手　　挙脚した。彼女は一同の注目を浴びた。

「あたしはウサギさんの、とりわけもも肉だけを食べたいわ。ねえ、ウサギさんの脚を頂いてもいいでしょう？」

副リーダーは頭上に数式を思い浮かべ、少し考えてからうなずいた。

「いいだろう。それで、脚は合計八本あるが何本食べたいんだ」

「うち四本を頂くというのはどうかしら？」

ただちに異議が飛んできた。納得がいかないのは今回の狩りで大活躍した古株のオオカミである。

「君が四本も食すというのは、少し納得がいかないな。なぜなら君はひとつも獲物を獲っていない。我々はたしかに共産主義を貫いて

はいるが功績が反映されないとわかれば全体の士気が下がり今後の狩りにも支障がでよう。君は希望の四本のうち一本を今回の貢献者にゆずり、残りの三本で我慢するのが妥当だと俺は思う」

メスオオカミの反論は喉まで出掛かっていたが、一足早く老いたオオカミが申し訳なさに口を挟んだ。

「いつも皆の脚を引くだけのわしであるから、その意見に反論はできんのう。あまつさえ食も細くなってきておるから、少しだけでも恵みがあれば満足じゃ。しかし若いもんはしつかり食べんといかん。彼女に四本食べさせてあげ、かわりにわしのぶんを半分にするというのはどうじゃろうか」

メスオオカミは老いたオオカミに身を寄せ、おじいちゃん……とつぶやいた。きわめて論理的なオオカミたちも、これには思わず涙ぐむ。

「あなたの言い分はわかった。彼女に四本の脚を与え、かわりに食欲の衰えたあなたには半分の量で我慢してもらおう。みんなもそれでいいな」

副リーダーが要点をまとめ、一同はこれに深くうなずき返した。一同はしばしのあいだ感傷に浸った。老いたオオカミとメスオオカミのやり取りをいつまでも浮かべ、暖かな想いを心に染みこませた。

新参者のオオカミが、ふと思いついたことを言った。

「あのう、てだれの者がもう一度狩りにでて、もう一匹獲物を獲ってくるというのはどうですか？」

副リーダーは慌てて目を閉じた。彼の頭上に築かれた数式が雲集霧散しているのが見て取れた。

「待ってくれ、それだと今までの計算がペアになる。たしかにもう一つ獲物があれば話はすんなりと進むはずだったのだが、キツネの肉を少し食べたいリーダーと、ウサギの脚を四本食べたい彼女と、皆の半分で構わないじいさんと、じいさんの残りを余計に食べたい彼の要望を取り入れた上では各獲物を半分ずつという理想的な分配

方式は通じないぞ」

さらに古株が問題点をつけ加えた。

「狩りが成功するとも限らんし、それに残業するのはどうせ俺とリーダーだろう？ 割に合わない」

完全に論破された新参者は首を引つ込めて「おっしやるとおり」と涙声で言った。彼の発言で感傷的なムードはすっかり白けたが、きわめて論理的なオオカミたちはさっさと頭を切り替えて残りの分配に全力を注いだ。

それから半刻余りを費やしてようやく全員が納得のいくかたちに収まった。彼らは腹を空かせていたが、きわめて論理的なオオカミの集団はいつでも静かにゆっくりと食事をとった。

食事のさなかこんな談笑があつた。

「副リーダー、君は本当に頭がいい。私だけではみんなを納得させることはできなかっただろう」

少量のキツネを食べながら、リーダーは全員に行き届く大きな声で副リーダーを労った。一同もこれに同意し、賞賛に満ちたまなざしを副リーダーに送った。

「リーダーは狩りと統率力に長けるが計算が苦手だからな」

古株は軽口を叩き、リーダーを盗み見てにやりと笑った。リーダーはすねた様子で「放っておけ」と言った。

「そう言う古株はがつついていて駄目ね。おじいちゃんがいなかったら、あたしはきつと飢えていたわ」

メスオオカミは先ほどの異議の件をまだ根に持っていた。四本目のウサギの脚をかじりながら、意地悪な視線を古株に向ける。古株は気づかない振りを決め込んでいかにも面倒臭そうなため息をついた。

「とにかく副リーダーがいないと成り立たないんだ、我々は」

「いやあ」

副リーダーは柄にもなく照れて笑った。一同が満足するのを、満  
足げに眺めた。たしかに彼はとても優秀だった。ただし自分に獲物  
が渡っていないことにはまだ気づいていなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3330e/>

---

論理ウルフ

2010年10月8日15時58分発行